

【A】第1発表(13:10~13:35)

発表者：北澤佑太さん(信州大学教職大学院)

タイトル：英語科における言語活動を通じた学習ストラテジー指導方法の開発—学習者のリフレクション能力の向上を目指して—

(要旨)

本研究は、英語の授業における言語活動を通じた学習ストラテジー指導の在り方を検討し、学習者のリフレクション能力の向上を目的とした実践研究である。中学1年生を対象に、リフレクションストラテジー(RS)の明示的指導と、補助質問付き振り返りフォームによる継続的支援を組み合わせ、その効果をアンケート、振り返りの記述分析、1名の生徒に焦点を当てた事例研究を通して検証した。研究の結果、アンケートではRSの理解度および今後の活用意識に関する項目で高い評価が確認された。また、記述分析からは指導前と比べて指導後の振り返りにおいて、学習内容の整理・活用・改善計画に関する記述の質の向上が見られ、事例研究からも本実践が学習を客観的に捉える姿勢の涵養に有効であることが示唆された。以上より、言語活動を通じた学習ストラテジー指導は、英語力の向上と学習者の自律支援を両立し得る有効な指導方法であることが示唆された。一方で、個別最適な支援の充実に加え、RSを実際の学習場面で活用し、学習を自律的にコントロールする機会を設ける必要性も明らかとなった。

コメンテーター：奥住桂先生(埼玉大学)

【A】第2発表(13:40~14:05)

発表者：川口陽来さん(皇學館大学)

タイトル：小学校外国語教育におけるSmall Talk指導—「話すこと」への効果について—

(要旨)

小学校第5学年を対象に、Small Talk指導の継続が児童の英語発話パフォーマンスに与える影響を、量的・質的側面から検証したものです。分析の結果、学年当初から継続的に指導を導入した学級(5-1)では、総語数や発話継続時間といった量的拡大に加え、やり取りの継続性、流暢性、文法の正確さといった質的側面でも顕著な向上が認められました。一方、学期途中から導入した学級(5-2)では、発話時間の増加は見られたものの、一発話あたりの語数や自発的な問いかけの伸長は限定的であり、発話時間の増加が直ちに質的向上に直結しない量と質の乖離が観察されました。これは、やり取りの質的発展には早期からの継続的な実践が不可欠であることを示唆しています。また、指導過程において、つまづきを共有し表現を再構成する中間交流を組み込んだことが、児童のメタ言語的機能を促し、質的向上を支える要因となったと考えられます。結論として、Small Talk指導は適切に設計され継続されることで、児童が既習表現を主体的に活用し、相手に応じた柔軟なやり取りを構築するための有効な実践となり得ることが明らかとなりました。

コメンテーター：内野駿介先生(北海道教育大学)

【A】第3発表（14：10～14：35）

発表者：矢崎優斗さん（山梨大学教職大学院）

タイトル：中学校数学科と英語科における教科横断型授業の可能性—CLILを取り入れた「説明する」活動を通して—

（要旨）

本研究は、中学校英語科における「比較級」の学習に CLIL（内容言語統合型学習）を導入し、英語母語話者の聞き手に伝える活動に数学科の「1次関数」を活用することの効果を検証することを目的とする。方法として、比較級を用いて ALT に発表するアウトプット活動に、1次関数のグラフを取り入れる授業を県内の公立中学校にて3時間実施した。エアコン（冷房）を使う時間を x 、累積消費電力量を y としたときに y は x の1次関数であるとみなせ、26°C設定のグラフのほうが、20°C設定のグラフより下側にあることをもとに、生徒は様々な言語化をした。分析の結果、本教材は良き CLIL 教材といえること、数学を英語に関連付ける A to B 型合科的指導として位置付けられて教科横断型授業の一例になること、そして、両教科において学習効果の向上につながる相乗効果も認められることがわかった。今後は他単元や他教科への応用可能性を検討する。

コメンテーター：柳田綾先生（桜花学園大学）

【B】第1発表（13：10～13：35）

発表者：藤澤宜広さん（名古屋学院大学大学院）

タイトル：学術文献コーパスに基づく経済学英語語彙表の構築

（要旨）

高等教育における英語による専門教育(EMI)の世界的な拡大に伴い、近年、日本でもその導入が進んでいる。学術的にも、EMIに特定目的英語(ESP)の側面を融合させた、EMI目的の英語(English for EMI)の発展が提唱されている。とりわけ、EMIに関するシステムティック・レビューにおいて、EMIが受動技能および語彙の向上に有意に有効であるとの結果が得られている。そこで本稿は、将来的な英語教育と経済学教育の融合を目指し、主に日本の大学生が、EMIにおいて経済学学術文献を読む際の足場となる語彙表を構築することを目的とする。Journal of Economic Perspectives (JEP)から学部教育向けに選定された論文群 JEP in the Classroom をテキスト化した自作コーパスを作成し FOWN コーパスとの比較で特徴語を抽出した結果、376語からなる経済学英語語彙表が構築された。構築された語彙表は、専門分野の文脈に即して学術語彙を学修する必要性を示唆していた。また、経済学固有の語彙知識や、経済学及び統計解析に関する理解と説明力が指導者に求められる可能性が示された。

コメンテーター：山本大貴先生（信州大学）

【B】 第2発表（13：40～14：05）

発表者：安藤嘉さん（北海道教育大学札幌校）

タイトル：日本の大学生の語彙処理速度と語彙サイズに関する研究：CELP テストと VST-NJ8 の結果に基づいて

（要旨）

実際のコミュニケーションには、単語を知っているだけでなく、その英単語を使える流暢さが不可欠である。本研究では日本人大学生 124 名を対象に、語彙サイズと処理速度の関係性、およびそれらが TOEIC スコアに及ぼす影響を調査した。調査の結果、語彙サイズと処理速度は独立して英語力に寄与しており、サイズの影響を除いてもなお、処理速度がスコアの強力な予測因子となることが示された。しかし、難易度の高い語彙ほど処理が不安定化する傾向も見られ、学習者の語彙知識が使えるに至っていない課題も確認された。考察として、現在の英語教育は知識の蓄積に偏重している可能性がある。実際のコミュニケーション場面で英単語を使える能力を育成するためには、教科書だけでなくコーパス等も活用することや語彙使用の自動化を促す指導を行う必要がある。

コメンテーター：寺井雅人先生（愛知工科大学）

【B】 第3発表（14：10～14：35）

発表者：頓所美郷さん（名古屋学院大学大学院）

タイトル：中学校の英語科検定教科書における定型表現の分析と教師の意識調査

（要旨）

日本の中学校英語教育では、語彙学習は長らく単語の習得が中心であった。しかし近年、複数語がまとまりとして処理・産出される定型表現（Formulaic Sequences: FS）が、自然で流暢な英語使用を支える単位として注目されている。そこで本研究は、定型表現の提示実態、実使用との対応、および教師の認識と指導実践の特徴を明らかにすることを目的とした。主要 6 社 18 冊の中学校英語科検定教科書を対象に、AntConc を用いて 2～4 語の連続語を抽出し、基準に基づき FS を同定した。さらに、COCA（SPOKEN）との比較および英語教師 33 名への質問紙調査を行った。分析の結果、教科書では文型定着や自己表現に関わる FS が段階的に配置されている一方、実際の英語使用との乖離が見られた。また、教師は FS の重要性を認識しているものの、技能別指導では使用場面や意味機能への内省を促す指導が十分とは言えなかった。以上より、実使用を踏まえた FS の選定と、技能横断的な指導体系の必要性が示唆された。

コメンテーター：高木亜希子先生（青山学院大学）

【A】 第 1 発表 (15 : 50～16 : 15)

発表者：横山光さん (山梨大学)

タイトル：The Influence of Katakana Orthography on English Pronunciation: A Case Study of Japanese University Students

(要旨)

本研究は、日本語に定着した英語由来の外来語が、日本人英語学習者の英語発音に与える影響を明らかにするとともに、発音に対する学習者の意識や経験を調査することを目的とした。英語教育を専攻する大学生 13 名を対象に、発音テストと質問紙調査を実施した。発音テストでは、母音、子音、語強勢、表記揺れの 4 観点から計 30 語の外来語を用い、カタカナ表記の影響を分析した。その結果、特に母音、語強勢、表記揺れにおいて正答率が低く、高度な学習者であっても外来語による負の転移や化石化の影響が残存していることが示された。質問紙調査からは、多くの学習者が自身の発音に自信を持たず、発音への不安が英語発話の回避や消極性と関連していることが明らかになった。また、学校教育における発音指導の機会が限定的である一方、学習者自身は発音の重要性を認識していることが分かった。さらに、幼少期の英語環境への接触や直接的な発音指導が、カタカナの影響の軽減に寄与する可能性も示唆された。本研究は、英語教育において発音指導を実施することが、学習者の発音改善ならびに発音不安の緩和に寄与し、英語での円滑なコミュニケーションの促進に資することを示している。

コメンテーター：天野修一先生 (広島大学)

【A】 第 2 発表 (16 : 20～16 : 45)

発表者：能登日向子さん (中京大学大学院)

タイトル：have の「揺らぎ」から文法指導を考える—現在完了形導入が促す知識の再構成—

(要旨)

本研究は、中学校英語における現在完了形 have の導入が、既習事項である動詞 have の理解にどのような影響を及ぼすのかを検討し、学習者の文法知識がどのように再構成されていくのかを明らかにすることを目的とした。英語学習において新たな文法事項の学習は、単なる知識の追加ではなく、既存の知識体系に揺らぎや混乱をもたらす場合がある。本研究では、このような「揺らぎ」を誤りとして排除するのではなく、知識変容の過程として捉えた。

国立大学教育学部附属中学校の 2 年生を対象に現在完了形を扱う授業実践を行い、事前・事後テスト、誤文訂正課題、記述回答を分析した。特に didn't had や can has といった誤用に着目し、学習者の説明内容を質的に分析した結果、現在完了の導入によって既習知識が一時的に不安定化する様相が確認された。さらに、誤用の仕方や説明の観点から理解のあり方を整理したところ、学習過程には 10 の異なるタイプが存在することが明らかになった。これらの結果から、誤りや混乱は学習者が知識を再構成する重要な契機であり、揺らぎの多様性に目を向けた文法指導の必要性が示唆された。

コメンテーター：今井裕之先生 (関西大学)

【B】 第1発表（15：50～16：15）

発表者：坂井泰智さん（岐阜大学）

タイトル：「わからない」から立ち上がる英語科教育の存在意義

（要旨）

本稿は、公教育における英語科教育の存在意義を再考する試みである。

話者の意図が正確に伝わるのが理想とされることが多い。しかしコミュニケーションにおいては、言葉はしばしば意図とは異なる形で他者に届き、予期せぬ現実を動かす。本稿ではこの現実を、東浩紀にならい「誤配」と定義する。また、同じ空間を共有していても、個々の経験や理解は一様ではない。こうした「わからなさ」や「ズレ」を失敗として排除するのではなく、英語科教育が成立するための本質的な条件として捉え直す。その上で、公共性と英語が持つ固有性の観点から検討する。結論として、英語科教育の存在意義は、＜誤配＞を前提としたコミュニケーションの中で、意味の不透明さに耐えつつ、選べない他者と関係を調整し続ける力能を構築することにある。本稿は、「わからない」ことから出発し、それを他者との関係構築の契機へと転換する営みとして英語科教育を捉える。

コメンテーター：佐古孝義先生（明星大学）

【B】 第2発表（16：20～16：45）

発表者：小平温大さん（信州大学教職大学院）

タイトル：生徒が根拠をもって活動を選択する英語の授業実践—自律した学習者育成を目指して—

（要旨）

本実践では中学校英語科における個別最適な学びの実現を目指し、生徒が自己の課題を捉え、根拠をもって準備活動を選択する授業を設計した。中2の2クラス（各40名、計80名）で単元末発表を2回実施し、発表で表出した課題を「発表内容／パフォーマンス」（宣言的／手続き的知識）で整理させた上で、それらを改善するために①内容・表現確認②個別練習③ペア発表・フィードバックからなる準備活動を選択・組合せさせた。5件法アンケート（英語力・動機づけ・自己調整）、振り返り、観察記録・定点映像を分析した結果、実践①は3観点平均4以上であった一方、時間設定が厳密で学習経路が固定化し③未選択者が生じた。実践②では時間を目安化しDo-Learn-Do againの選択例を提示した結果、③を一度以上選ぶ生徒がほぼ全員となり肯定的評価は維持された。今後は、課題把握と選択意図が不十分な生徒への個別支援を適切なタイミングで行うことが課題である。

コメンテーター：稲葉英彦先生（静岡大学）